

ナイチンゲール、1842年から1854年までの成長の軌跡：エンブリーとリーハースト及びロンドンでの出来事を基にして

著者	徳永 哲
著者別名	徳永 哲
雑誌名	日本赤十字九州国際看護大学intramural research report
巻	9
ページ	39-50
発行年	2010-12-25
URL	http://doi.org/10.15019/00000035

報告

ナイチンゲール、1842年から1854年までの成長の軌跡 —エンブリーとリーハースト及びロンドンでの出来事を基にして—

徳永 哲¹⁾

ナイチンゲールの看護への第一歩は1842年リーハーストに隣接するホロウェイ・ヴィレッジの貧しい病人の看病から踏み出された。その後、ソールズベリー施療病院を訪れるようになって、看護師になる願望を強く抱くようになった。しかし、当時の看護職は社会的に最下層の職業と見なされていた。ナイチンゲールの願望を知った両親は激しく反対し、彼女の行く手を遮った。ナイチンゲールは失望し、自殺を考えるようになった。そうした苦悶が続く日々の最中に、エンブリー・ハウスに2人のアメリカ人が滞在した。1人は博愛主義者ハウ博士であり、他の1人は世界最初の女医ブラックウェルであった。この2人との出会いはナイチンゲールに大きな勇気をもたらした。やがて彼女の強い意志と情熱は父ウィリアムの心を動かし、経済的援助を取り付けることができ、さらにハーバート夫妻がナイチンゲールの才能を高く評価し支援した。19世紀中頃の麻酔の普及と保健衛生への自覚の高まりが医療に新しい時代をもたらした。ナイチンゲールは時代の申し子となって、1854年に近代的な病院看護確立に向けて新たな一歩を踏み出した。

キーワード: エンブリー・ハウス、リーハースト、ソールズベリー施療病院、完全な自由、病院看護改革

I 緒言

2008年度に続いて、2009年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究費の給付を受け、イギリスのナイチンゲール所縁の地を訪問した。

2008年度の最も大きな成果は、ハンプシャーのエンブリーハウス(Embley House)と聖マーガレット教会(Church of St. Margaret)、そしてダービーのナイチンゲール・ホーム(The Nightingale Home)を訪れたことであった。

さらに、ウィリアム・ラスボーン(William Rathbone)やアグネス・ジョーンズ(Agnes Jones)などを通して、ナイチンゲールが間接的に関わったリバプールを訪れ、港湾施設の周辺に広がる貧民街の跡地を歩いた。

リバプールの書店で得た書籍 Peter Aughton: *Liverpool, A people's history*, Carnegie, 1990. と David Hollett: *Passage to the New World, Packet Ships and Irish Famine Emigrants 1845-1851*, P.M.Heaton, Abergraveny, Gwent. 1995. を主要文献にして、報告論文『19世紀中頃のリバプールとナイチンゲール』を日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report 第8号に上梓することができた。

2009年度は、2008年度に到達できなかったウィルトシャーのソールズベリーとダービシャーのリーハースト(Lea Hurst)を訪れた。

ナイチンゲールが20歳の頃よく行ったとされている中世の門前町ソールズベリーを訪れた際に、18世紀に建ったソールズベリー施療病院(Salisbury Infirmary)を探しあてることができた。

次に、リーハーストへはマトロックを経由して行った。リーハーストの土地管理者の善意を得て、ナイチンゲール一家の最初の住居リーハースト・ハウス(Lea Hurst House)の外観を見ることができた。さらに、ナイチンゲールが若い頃、母親に連れられて貧しい病人の現実を見たホロウェイ・ヴィレッジ(Holloway Village)を散策した。

リバプールへも足を運んだが、港湾沿いの貧民街はすべて取り払われていて、新しい宅地に変えられていた。2009年度報告論文は2008-9年のナイチンゲール縁の地探訪及び2年間に収集した資料の解読の成果をひとつに本論としてまとめたものであり、内容はそれぞれの異なった成果を第1章から第3章に分けて別々に論じている。

第1章 リーハースト及びエンブリー探訪とソールズベリー施療病院発見
第2章 ナイチンゲールの成長に影響を及ぼしたエンブリー・ハウス3名の滞在者たち
第3章 19世紀中頃のロンドンとナイチンゲール

1) 日本赤十字九州国際看護大学

徳永：ナイチンゲール、1842年から1854年までの成長の軌跡
ーエンブリーとリーハースト及びロンドンでの出来事を基にしてー

Ⅱ 研究方法 現地探訪及び文献研究 教関連の文献(3件)、医療及び公衆衛生関連の文献(4件)、
ナイチンゲール及び看護学関連の文献(14件)、イギリス 文学関連の文献(3件)、
及びロンドンの歴史・社会関連の文献(10件)、キリスト その他 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

〔文献一覧表〕

関連別	著者(編者)、著者、出版社、出版年など
A. ナイチンゲール及び看護学関連の文献	<p>1) Mark Bostridge: <i>Florence Nightingale</i>. Penguin Books, 2008.</p> <p>2) フロレンス・ナイチンゲール著、小玉香津子/尾田葉子 訳ー看護覚え書き、本当の看護とそうでない看護. 日本看護協会出版会, 2004</p> <p>Florence Nightingale: <i>Notes on Nursing, what it is and what it is not</i>. Harrison, 59, Pall Mal, 1859.</p> <p>3) セシル・ウーダムスミス著、武山満智子/小南吉彦 訳ーフロレンス・ナイチンゲールの生涯. 現代社, 1983</p> <p>Cecil Woodham-Smith: <i>Florence Nightingale 1820-1910</i>. Constable, London, 1950.</p> <p>4) ルーシー・セーマー著、湯楨ます訳ーフロレンス・ナイチンゲール. メディカルフレンド社, 1963</p> <p>Lucy Seymer: <i>Florence Nightingale</i>. Faber & Faber, 1950.</p> <p>5) 湯楨ます監修 ナイチンゲール著作集第1巻～第3巻. 現代社, 1977</p> <p>6) 薄井坦子/小玉香津子/田村真/山本利江/和伯淑子/小南吉彦 訳ーフロレンス・ナイチンゲール看護小論集、健康とは病気とは看護とは. 現代社, 2003</p> <p>7) ヒュー・スモール著、田中京子訳ーナイチンゲール神話と真実. みすず書房, 2003</p> <p>Hugh Small: <i>Florence Nightingale Avenging Angel</i>. Constable and Company Limited, 1998.</p> <p>8) 徳永哲著ー19世紀中頃のリバプールとナイチンゲール. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 <i>Intramural Research Report</i> 第8号 p.31-41</p> <p>9) Michael D. Calabria and Janet A. Macrac (ed.): <i>Suggestions for Thought by Florence Nightingale, Selected and Commentaries</i>. University of Pennsylvania Press, 1994.</p> <p>10) Collected Works of Florence Nightingale Volume 11. Lynn McDonald (ed.): <i>Florence Nightingale's Suggestions for Thought</i>. Wilfrid Laurier University Press, 2008.</p> <p>11) リットン・ストレイチー著、中野康司 訳ーヴィクトリア朝偉人伝. みすず書房. pp.5-75. 2008</p> <p>同著、樋口稔訳ーナイチンゲール伝他一編. 岩波書店, 2009</p> <p>Lytton Strachey: <i>Eminent Victorians</i>. A Harvest Book, pp.135-203. 1918.</p> <p>12) 多尾清子、統計学者としてのナイチンゲール. 医学書院, 2004</p> <p>13) Gena K. Gorrell: <i>Heart and Soul, The Story of Florence Nightingale</i>. Tundra Books, 2005.</p>
B. イギリス及びロンドンの歴史・社会関連の文献	<p>1) ヒュー・クラウト編、中村英勝 監訳ーロンドン歴史地図. 東京書籍, 1997</p> <p>2) マルカム=フォーカス/ジョン=ギリングガム責任編集. 中村英勝/森岡敬一郎/石井摩耶子 訳ーイギリス歴史地図、東京書籍, 1990</p> <p>3) ヘンリー・メイヒュー著、松村昌家/新野緑 編訳ーヴィクトリア朝ロンドンの下層社会. ミネルヴァ書房, 2009</p> <p>4) L・C・B・シーマン著、社本時子/三ツ星堅三 訳ーヴィクトリア時代のロンドン. 創元社, 1995.</p> <p>L.C.B. Seaman: <i>Life in Victorian London</i>. B.T.Batsford, 1973.</p> <p>5) 角山榮/川比稔 編ー路地裏の大英帝国. 平凡社, 1998</p> <p>6) 角山榮/村岡健次/川比稔著ー生活の世界歴史10 産業革命と民衆. 河出書房新社, 1997</p> <p>7) カヴィン・ウェイトマン著、植松靖夫 訳ー図説テムズ河物語. 東洋書林, 1996</p> <p>8) レイ・ストレイチー著、来栖美知子/出淵敬子 監訳ーイギリス女性運動史 1792-1928. みすず書房, 2008</p> <p>9) 櫻庭信之/定松正/松村昌家/P. スノードン編著ーロンドン事典. 大修館, 2002</p>

C. キリスト教 関連の文献	1) シオバン・ネルソン著、原田裕子 訳 一黙して励め、日本看護協会出版会、2004 Sioban Nelson: <i>Say Little, Do Much</i> . Pennsylvania Press, 2003. 2) 塚田理著―イングランドの宗教、教文社、2006 3) 岩波哲学・思想事典、岩波書店、1998
D. 医療及び 公衆衛生関連の 文献	1) 井上栄著―感染症、中央公論社、1877 2) スティーヴン・ジョンソン著、矢野真千子訳―感染地図、河出書房新社、2007 Steven Johnson: <i>The Ghost Map</i> . Riverhead Books, 2007. 3) Peter Vinten-Johansen, Howard Brody, Nigel Paneth, Stephen Rachman, Michael Rip: <i>Cholera, Chloroform, and the Science of Medicine, A Life of John Snow</i> . Oxford, 2003.
E. 文学関連の 文献その他	1) エリザベス・ギヤスケル著、阿部幸子/角田栄子/宮園衣子/脇山靖恵 訳 ールース、近代文芸社、2009 Elizabeth Gaskell: <i>Ruth</i> . Oxford, 2008. 2) チャールズ・ディケンズ著、伊藤弘之/下笠徳次/元貞広 訳 ーアメリカ紀行、岩波書店、2006

Ⅲ 本論

第 1 章 リーハースト及びエンブリー探訪とソールズベ リー施療病院発見

1. リーハースト及びその周辺探訪

1) リーハースト・ハウス A-1) 3) 9) 10), C-2) 3), E-3)

ダービシャーの山岳地帯入口の町マトロックから路線バスでダーウェント川沿いに約 15 分走った所にホロウェイ・ヴィレッジがある。そのヴィレッジに取り巻かれるようにしてリーハーストがある。

リーハーストというのは本来その土地の地名ではなく、ナイチンゲールの父ウィリアム(William Nightingale)が家を建てる時に名づけた広大な敷地の呼び名である。



〈写真 1〉2009 年秋、撮影筆者

公道から邸宅へ入って行く私道の閉鎖された外門。現在の所有者名ではなく、ウィリアムが呼んだ地名が貼り付けられている。

ウィリアムはヨークシャーに生まれたが、その時の名はウィリアム・エドワード・ショア(William Edward Shore)であった。21 歳の時、ダービシャー北西部に広大な土地を所有していた伯父ピーター・ナイチンゲール(Peter Nightingale)の産を受け継ぐことになり、姓がショアからナイチンゲールに変わった。

1818 年にウィリアムはファニー・スミス(Fanny Smith)と結婚した。その 3 年後、伯父ピーター・ナイチンゲールから相続していた土地の一角、ダーウェント川

を見下ろす高台の中腹に邸宅を構えた。以下の〈写真 2〉から〈写真 3〉はその邸宅の写真である。



〈写真 2〉2009 年秋、撮影筆者

ナイチンゲールの家系とはまったく無関係の人が邸宅を買い取って家主になっている

父ウィリアムはプロテスタント系のキリスト教徒であったが、どの教会にも所属していなかった。彼の宗派は当時イギリスの知識人たちに広まっていたユニテリアン(Unitarian)という急進的な一派であった。

ユニテリアンというのは、『岩波哲学・思想事典』によると、その教理は「神としての本性をもつのは父なる神のみであり、イエス・キリストはまったくの人間」であると決めつけ、父と子と聖霊の三位一体論や神としてのキリスト崇拝を拒否した。

ウィリアムは、教会という組織にまったくとらわれることなく、リーハーストの邸宅内にチャペルをつくった。そこに家族が集まり、福音書を読み、神を賛美した。

父ウィリアムの自由な信仰のあり方は、ナイチンゲールのキリスト教信仰に大きな影響を及ぼし、彼女は自由で個性的な宗教観を形成していくことができた。1860 年に彼女が書いた *Suggestions for Thoughts to searchers after Truth among the Artizans of England* には教会組

織や秘跡にとらわれる世俗的な信仰のあり方を批判しながら、信仰を捨てて社会主義などの無神論に傾く社会にあって、科学と宗教の融合された世界に人生の意味や目的を見出そうとする彼女の葛藤を読み取ることができる。



〈写真 3〉2009 年秋、撮影筆者

書斎側から撮った内門と書斎の窓。ナイチンゲールの部屋は書斎の上にあつたらしい。内門の立派な門柱だけが残っている。

2) リーハーストの環境 A-1) 3) 8) 13), B-4) 5) 6), E-3)

ナイチンゲール家がリーハーストで暮らすようになった時、ナイチンゲールはまだ幼児であった。リーハーストはイングランド中西部の山中にあって冬の寒さは相当に厳しかった。イタリアやロンドンでは元気だったナイチンゲールはリーハーストに移るとすぐに気管支炎と咳に苦しむようになった。

母ファニーは冬の寒さとロンドンから 200 キロ以上も離れた不便さに耐えられなくなった。ファニーに説得されたウィリアムは、1825 年に、イングランド南部の温暖なハンプシャーの赤レンガ造りの豪邸エンブリー・ハウスを買い取った。家族は秋から春にかけてエンブリーに移り、豪邸に多くの客を招いて賑やかな毎を送るようになった。

20 歳近くなったナイチンゲールは騒々しいエンブリーの生活を嫌い、山中の静かなリーハーストを好んだ。人との社交的交流を遠ざけ、夢想の世界に遊ぶようになったナイチンゲールを母ファニーは変人と決めつけるようになった。

ナイチンゲールがリーハーストを好んだ理由にもう一つあった。それはリーハースト周辺のホロウェイ・ヴィレッジの貧しい住民たちの存在であった。

リーハーストが在るダービシャー北部は、イングランドで最も美しい山岳地帯である。そこには、また、水量豊かな溪流が存在する。ダーウェント川はホロウェイ辺りからマトロック付近で最も多くの水量を湛えている。18 世紀には、ダーウェント川のその豊富な水を利用して、大きな紡績工場がつくられ、その近くのホロウェイ・ヴィレッジには多くの紡績職人が住んでいた。

しかし、19 世紀になり、蒸気機関と産業資本主義が発達し、産業の形態が大きく変った。巨大産業都市が出現し、機械化と大量生産方式が発達した。特殊技能を持たない労働者が都市に集中した。一方、職人の技能によって成り立っていた旧式の紡績工場は廃れていったのである。ダーウェント川沿いにあった大きな紡績工場も廃れ、ホロウェイ・ヴィレッジの紡績職人も職を失ってしまった。

3) リーハーストから看護の道への第一歩 A-1) 3) 14)

1840 年代のイギリスは非常に大きな矛盾を抱えていた。産業都市は巨大化し、繁栄する半面、全国的に農作物が不作になったうえに、穀物法によって穀物の輸入がなされず、穀物の値は急騰した。

そのうえ、インドをはじめアジアの植民地やアイルランドから貧民がイギリスに流れ込んで来た。彼らは日雇い労働者やホームレスとなって、ロンドンなどの都市にあふれた。飢餓の時代の到来である。ホロウェイ・ヴィレッジにもその時代の波が襲った。

1842 年ナイチンゲールは母ファニーに連れられて、ホロウェイ・ヴィレッジの村人の小家(cottage)を訪問した。母ファニーは、何不自由なく育てている娘に貧民の不幸な実態を見せておこうと連れて行つたらしいが、村人の悲惨な生活を見たナイチンゲールは、まさに自らの天命を悟る切っ掛けとなったのである。この時から、目の当たりにした狭い家に寝たきりの老人や病人の悲惨な残像がいつまでも心に住み着き、彼女の心を揺さぶり続けたのである。

そして、ナイチンゲールは貧しい村の子供への教育はどうなっているのか、村の衛生状態や食生活などの悪さを改善しなければいけないのではないかと、さらに問題解決のために資金援助などすべきではないかと要求した。母ファニーは次から次に出されるナイチンゲールの要求にノイローゼになりそうになったということである。

高貴な家庭に育ち、教養と豊かな感性を備えた若い淑女は、悲惨な生活を送る人々に対して同情や哀れみを示すであろうが、母ファニーがナイチンゲールに期待したように、自分の生活が豊かで恵まれていることを幸いに感じ、親に感謝するのが一般的であろう。しかし、ナイチンゲールは違っていた。彼女は悲惨さを見て、何故そうなるのか、それを無くすにはどうしたらよいのか、自分のできることは何か、と感性だけでなく、理性でもってその解決策を考えたのである。

2. エンブリー・ハウス A-8) E-3)

ロンドンからハンプシャーのサウスアンプトンまでは南西に鉄道で100キロほどの道程であるが、そこから更にローカル線で10キロ余りほど行ったところにロムジー(Romsey)という自然豊かな小さな町がある。その町の近くにナイチンゲール家第二の家であったエンブリー・ハウスが在る。

エンブリー・ハウスは現在パブリック・スクールの校舎の一部として使われている。



〈写真4〉2008年秋、撮影筆者

〈写真4〉はハウスの入り口付近である。入り口を入るとすぐに居間らしき部屋があるが、現在は学生と教師の談話室になっている。入って右手にはナイチンゲールが父ウィリアムから勉強を習った書斎があったが、現在は図書室になっている。



〈写真5〉2008年秋筆者撮影 ハウスの裏側

この豪邸に家族4人と使用人だけが住んでいた。ロンドンから近いこともあってナイチンゲールの人生に影響を及ぼす著名な人物たちが滞在した。

3. ソールズベリー施療病院の発見 A-1), E-3)

ホロウェイ・ヴィレッジでの体験以来、ナイチンゲールはどのようにすれば貧しい病人のために働くことができるのか、その方法を模索し続けた。

彼女は若い頃、ハンプシャーのエンブリーから数マイル離れたウィルトシャーのソールズベリーをひとりでよく訪れた。

カトリックや看護修道女(Nursing Nun)に関心を持っていたナイチンゲールは、外壁の彫像に童貞マリアを讃えるソールズベリー大聖堂とその周辺の落ち着いた雰囲気が気に入っていたのかもしれない。筆者はナイチンゲ

ールへの思いを抱きながら、門前街を抜けてナダー川の橋にさしかかった。その時赤いレンガ造りの建物に出合った。地上5階建てで威容のある建物であった。

その建物は1767年に建てられたソールズベリー施療病院の跡であった。何故そう断定できたか、偶然に近い状況で収めた写真から説明する。



〈写真6〉2009年秋、撮影筆者

〈写真6〉の中央より右手の4階と5階の境目コンクリートに文字が刻まれている。その文字列を拡大したのが〈写真7A B〉である。



〈写真7A↑, 7B↓〉



文字は横長に彫り込まれているために途中で切って上下2枚に分けた。先頭の部分が撮影ミスで欠けており、最後の数字の部分が汚れて見えにくくなっている。

そこには GENERAL INFIRMARY SUPPORTED BY VOLUNTARY CONTRIBUTION 1767 と刻まれている。1767 と断定した根拠は Wikipedia の 'Salisbury District Hospital' を検索した結果 "...and the actual site, with several houses then standing upon it, was purchased for the erection of the Infirmary. The houses were rendered as commodious as possible; and on the 2d of May, 1767, were opened for the reception of patients. とあることに拠る。さらに〈写真4〉の玄関口の部分だけを拡大すると、〈写真8〉に見られるように、PEMBROKE HOUSE と書き込まれている。PEMBROKE とは、18世紀後半に、このソールズベリーの GENERAL INFIRMARY の設立に最も大きな貢献をしたとされているウェールズの伯爵の名である。ペンブローク家はその後もウィルトシャーに多大な社会貢献

をしたとされている。



〈写真 8〉、〈写真 4〉の玄関口の上部を拡大

Mark Bostridge によると、A-1, p.93 ナイチンゲールが通うようになっていたソールズベリー施療病院は 1845 年に老朽化した部分の建て直しや婦人専用の病棟などの建て増しがあったということである。筆者が撮影した写真はその頃建てかわった病棟かそれ以後のものではないかと推測している。

第 2 章 ナイチンゲールの成長に影響を及ぼしたエンブリー・ハウス 3 名の滞在者たち

1. サミュエル・ハウ博士の滞在 A-1) 3) 10) 11), B-8), E-2) 3)

このハウスに滞在した著名人の中に博愛主義者サミュエル・ハウ博士(Dr. Samuel Gridley Howe)とその妻のジュリア(Julia Ward)がいた。2 人は 1844 年、アメリカ合衆国からヨーロッパへの新婚旅行の途中であった。

ハウ博士は 1824 年にハーバート大学(Harvard Medical School)で、医学博士号取得した後、盲目聾啞者(blind deaf-mute)の教育に優れた業績を打ち立てていた。

ハウ博士の名声は、ボストンのパーキンズ盲学校(Perkins School for the Blind)の生徒であった全盲聾啞者ローラ・ブリッジマン(Laura Bridgman)の育成報告によってイギリスにも届いていた。

ハウ博士の業績をさらにイギリスに感動的にもたらした人は、当時の最も売れていた作家チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)であった。

ディケンズは 1842 年にアメリカを旅し、*American Notes* を書いた。その中で、ディケンズはボストンのパーキンズ視力障害者協会マサチューセッツ園を訪れた時の感動を書き綴った。彼は、ハウ博士の報告書を辿りながら、指と手で人と交信できるようになったローラの喜びに満ちた姿を思い起こし、さらに、その時から変わることなく継続されている、教師と生徒との素晴らしい信頼関係をイギリス人に伝えたのである。

また、ハウ博士の妻ジュリアはボストンの婦人運動の指導者であった。彼女は「共和国の戦闘の賛美歌」(The

Battle Hymn of the Republic)を書き、ニューイングランド婦人クラブを結成していた。

ナイチンゲールは、全盲聾啞の生徒の能力を引き出してやり、妻の婦人活動を理解してやることのできるハウ博士であれば、自分の考えや計画を理解してくれるであろうと考えたに違いない。彼女はハウ博士にお願いし、2 人だけで語り合える早朝の時間をつくってもらった。

その対談でナイチンゲールは、家族に反対されている病院で働くことへの自分の思いを次のように聞いてもらった。

“Dr. Howe, Do you think it would be unsuitable and unbecoming for a young Englishwoman to devote herself to works of charity in hospitals and elsewhere as Catholic sisters do?” A-1), p.85

女性が病院での慈善事業に献身することに対して、博士は次のように応えた。

“... and you will find that there is never anything unbecoming or unladylike in doing your duty for the good of others. Choose, go on with it wherever it may lead you, and God be with you.” A-1), p.85-6

人の幸福のためにあなたが自分の義務を果たすことに対して、淑女らしからぬとか相応しくないとかいうことはあり得ないという博士の言葉に彼女は励まされ、自己の生き方に自信を抱くことができた。

1844 年、ナイチンゲールは自分に課せられた天命は病院の病人たちの世話にあると確信するようになった。またその時、病める人々にはカトリックの看護修道女が持っている資質すなわち慈愛と忍耐こそもっとも求められるものであるという認識に達していた。

しかし、病院で病人の世話をするにはそれだけでは足りなかった。彼女はリーハーストの近くに住んでいたある女性が無知な看護師の薬剤投与によって死んでしまうという痛ましい出来事を目の当たりにした。ナイチンゲールはその時の投薬名から不適切な処置であるということを知り、同時代の看護師の程度の悪さを心底憂えたのである。

ナイチンゲールは看護を実践する上では慈愛や忍耐だけでは足りないことを知った。看護に必要な知識や技術を身に付けなければならないと痛感したのである。

2. リチャード・ファウラー博士の滞在 A-1) 3) 4)

1845 年、ナイチンゲールはソールズベリー施療病院の有名な外科医ファウラー博士と知り合いになり、その博

士の下で、3ヶ月間看護に必要な知識や技術を学ぶ計画をたてた。また、ファウラー博士の方もナイチンゲールの才能を高く評価し、ナイチンゲールの計画を受け入れた。

Lucy Seymer はこうした決意の背景にはナイチンゲール自身が抱いていた “If you want to do anything properly you must learn how to do it.” という原理が働いていたと指摘している。A-4) p.19

その原理こそが、ナイチンゲールがクリミア戦争後、聖トマス病院看護学校設立へと繋がっていったのである。看護には基礎となる知識と相応の訓練が絶対に欠かせないものであるという原理こそが、近代的な看護を生み出したのである。

1845年に、ファウラー博士夫妻がエンブリー・ハウスを訪れて、滞在した。そして、その夜、ナイチンゲールは夕食の席で、3ヵ月間の計画を大胆にも両親に打ち明けたのである。彼女は博士夫妻が自分の後ろ盾になってくれるものと信じていたのかもしれない。

両親は娘の計画を聞くと非常に大きな衝撃を受け、間髪入れずに猛烈に反対した。その激しさにファウラー博士は思わず彼女の両親に同調してしまったのである。

当時の病院の看護職は世間では最悪最低の職と見なされていた。ファウラー博士はそのことは十分熟知しており、良家の子女が勤めるようなところではないと主張したのである。

結局、ナイチンゲールは1837年に神の召命を受けて以来、それに応える道を模索し続け、ようやく看護にその道を見出していた。ファウラー博士との出会いに彼女は大きな希望を見出していた。その矢先の出来事がそれであった。両親の反対の一声で計画は無残にも頓挫してしまった。彼女の失望は深く、自殺を考えるほどであった。

しかし、ナイチンゲールは両親のその時の反対に対して反抗はしなかった。Lucy Seymer はその時のナイチンゲールについて、次のように書いている。

It is interesting to observe that Florence never seems to have questioned that she owed obedience to her parents; she was not so ‘modern’ that she wished deliberately to defy them. A-4) p.21

彼女は、両親には従順に従うというイギリス上流家庭の子女のモラルをしっかりと守っていたのである。彼女は、強い信念と意志を抱いてその実現のためにまい進する近代女性の代表のように理解されがちであるが決してそうではなかった。そうした信念と意志は他者へ向けて発せられることは無く、自制と自虐という方向へ向かっ

たのである。

3. 女医ブラックウェルの滞在 A-1) 3) 4) 9) 10), B-8), E-3)

世界で最初の女医になったブラックウェル(Elizabeth Blackwell)が1850年に滞在した。

ブラックウェルは1821年にイギリスのブリストル(Bristol)で生まれたが、1832年に一家がアメリカ合衆国に移住したため一緒にアメリカに渡り、アメリカ国籍を取った。

ニューヨークのジュネーヴ医科大学(Geneva Medical College)で1849年に医学士の学位をとった。在学中彼女は開学以来初めての女子学生ということで教師からひどい差別を受けた。教師も同級生も彼女に冷たく、無礼な態度で接した。彼女は自分の性を隠すように服装を男子学生に合わせ、教室では奥端の席に座った。しかし、差別に屈することなかった。授業に出席し、最優秀成績で大学を卒業した。

しかしながら、アメリカではほとんどの病院で研修を拒否され、同年5月、フランスへ渡った。フランスでもアメリカと同様に、どこの病院も彼女を医師として認めてくれなかった。結局、パリの国立助産師学校ラマルニテ(La Maternite)に入って助産を学んだ。しかし、不幸なことに彼女が扱っていた赤ん坊から化膿性眼炎(purulent ophthalmia)をうつされて、片目が失明、残された目もほとんど視力を失い、ろうそくの光も霧の中にぼんやり見える程度になってしまった。彼女の外科医への道は視力喪失によって断たれてしまった。

悲運なブラックウェルに希望をもたらしたのは祖国イギリスであった。イギリス最古の病院(1123年創立)であり、付属の医学校(17世紀併設)を持っているセント・バーソロミュー病院(St. Bartholomew's Hospital)において卒業研修が認められたのである。1850年の秋、婦人病の領域を除くすべての領域で1年の研修を終えることができ、イギリス初の「女医」(Lady Doctor)となった。

1851年の春、クリミア戦争(Crimean War)時の陸軍大臣シドニー・ハーバート(Sidney Herbert)の妻エリザベス(Elizabeth)が、ウィルトンの自宅で第3子を出産することになった。エリザベスは出産に、ナイチンゲールとブラックウェルを呼んだ。ナイチンゲールとブラックウェルの出会いは、結果としてハーバート夫妻によって演出されたようなものであった。

その時、ナイチンゲールはブラックウェルの歩んだ道程を詳しくは知らなかったのかもしれない。ただ自分の

境遇が彼女の境遇と近いと思っていたかもしれない。

2人は友だちになり、ナイチンゲールはブラックウェルをエンブリー・ハウスに招いた。そして、豪邸を見せながら、ブラックウェルに次のように語った。

“Do you know what I think when I always look at that row of windows? I think how I should turn it into a hospital ward, and just how I should place the beds!” A-(1), p.153

ナイチンゲールは人を招いてパーティを開くことに豪邸を使うよりも病院として使うことを考えていた。どのような病棟につくりかえようか、ベッドの配置はどうしようかと考えていると語ったのである。1850年代に*Notes on Hospital*を出版するが、エンブリー・ハウスはその下地になっていたのかもしれない。

ナイチンゲールの話を聞いてブラックウェルはどのように思ったかは定かではないが、恵まれた境遇にあるナイチンゲールを羨んだのではないかと考える。

ナイチンゲール家の財力、家系、豪邸、人脈などそのどれをとっても並大抵なものではない。ナイチンゲールには身近に彼女を支えてくれる家族や親族があり、さらに有力な知人がいた。ナイチンゲールは、病院で病人の看護をしたいという願望が家族の反対にあって実現できずに苦しんでいたが、その苦しみはブラックウェルの苦しみの大きさととは到底比較できるものではなかった。

ブラックウェルは因襲的な格差差別社会の中で多くの障害にあいながら、一個の人間として、自己の能力を発揮できる場を必死に求め続けた。心身の犠牲を払い、苦勞と努力の結果、目的を達成することができたのである。

ナイチンゲールはブラックウェルが辿ってきた境遇を知るに及んで、真に強い女性の生き方を心に刻んでいたのかもしれない。彼女は、スクタリの野戦病院に赴くまでの間に強い意志を胸に秘めた女性へと変容していくが、そこにはブラックウェルの影響があったのかもしれない。

2人はロンドンに行き、病院をいくつか訪問し、レストランで食事をしながら語り合った。ナイチンゲールは再度カイゼルスワース(Kaiserswerth)に留学する意思を語ったということである。ブラックウェルはイギリスで開院することよりもニューヨークに戻ることを望んでいた。2人はそれぞれの思いを胸に別れた。

第3章 19世紀中頃のロンドンとナイチンゲール

1. 19世紀中頃のロンドンの病院 B-1) 2) 3) 4) 5) 6) 9), A-8)

1840年代になって、植民地などから移民や難民がイギ

リスに流入し、ロンドンの貧民層や下層労働者層は急激に増大した。それに伴い疫病や飢餓がロンドンに蔓延し、多くの患者を収容できる大規模な病院が必要になった。19世紀半ば頃までに旧ロンドン市とその周辺だけでも多くの病院が建てられていた。18世紀以降に建てられた主な病院を年代順に挙げると次のようになる。

- 1720年 ウェストミンスター病院 (Westminster Hospital)
- 1721年 ガイ病院 (Guy's Hospital)、1744年精神病棟建設
- 1733年 セント・ジョージ病院 (St George's Hospital)
- 1740年 ロイヤル・ロンドン病院 (Royal London Hospital)
- 1745年 ミドルセックス病院 (Middlesex Hospital)
- 1818年 チャリング・クロス病院 (Charing Cross Hospital)
- 1828年 王室施療病院 (Royal Free Hospital)
- 1831年 キングス・カレッジ病院 (King's College Hospital)
- 1833年 ユニバーシティ・カレッジ病院 (University College Hospital) 1846年エーテルを使った大手術に成功
- 1851年 セント・メアリー病院 (St. Mary's Hospital)
- 1854年医学校併設

さらに、聖トマス病院(St. Thomas' Hospital)などを加えると多くの病院が存在したことになる。しかし、上流階級の裕福な人々にはほとんど病院には通わなかった。有名な医師を家に呼ぶか、薬剤師から薬を処方してもらい、看護師に介護や世話をしてもらっていた。

その当時の病院の実態は、今日の病院からは想像できないほどひどいものであったらしい。寝具などは不潔なままにされ、悪臭が充満し、患者と看護師双方の道徳は乱れていた。しかし、そういった病院でも貧民層の人々にとっては、なくてはならないものであった。

上に掲げた病院では、結核、癌、天然痘などの重病の患者の治療は断られた。たとえ入院できたとしても隔離病棟に放置されていた。また、子供と婦人病は専門病院に行かねばならなかった。出産も取り扱われなかった。

専門病院は王立婦人科・産科病院(1816年)など産科専門の病院がいくつか存在した。また癌の治療では、世界最初の癌専門病院ロイヤル・マーズデン病院(Royal Marsden Hospital, 1851)が開設された。

2. 医療の変革と看護

1) 看護体制の改革 A-1) 2) 3) 4) 13), B-4) 6) 9), D-2) 3), E-3)

19世紀半ば、ロンドンの医療、特に外科手術に大変革が起きた。それは、麻酔が用いられるようになり、それまで不可能であったいろいろな部位の手術が可能になったからである。

ナイチンゲールはカイゼルスワース留学時にすでに麻酔による外科手術を見ていた。手術による疾患部摘出は効果的な治療であり、ナイチンゲールはそれが麻酔によってスムーズになされることを知ったのである。しかし、同時に、患者が手術後にかかる感染症の恐ろしさも知ったのである。カイゼルスワースの病院は清潔ではなかったために手術後に感染症にかかる患者が多かったということである。

新しい治療法に適合した清潔な環境づくり、感染症を防ぐ看護体制在が求められることを、ナイチンゲールはその体験を通して実感していた。

名著 *Notes on Nursing* に次のように書いた。

True nursing ignores infection, except to prevent it. Cleanliness and fresh air from open windows, with unremitting attention to patient, are the only defence a true nurse either asks or needs... A-2) p.34

清潔な環境づくり、換気による空気の清浄化などはまさに感染症予防のために彼女が考え出した斬新な看護のあり方を示すものであった。

外科手術の変革と進歩によって、選択の余地無く、看護に 24 時間常時看護体制と病棟全体に厳重な衛生管理体制が求められるようになったのである。さらに、医療や医薬に対する高度な知識が看護師自身に求められるようになったのである。

2) 公衆衛生とナイチンゲール A-2) 7) 12), B-1) 4), D-1) 2) 3)

チャドウィック(Edwin Chadwick)という公衆衛生の先駆者が 1842 年に労働者階級の衛生状態に関する報告書を刊行した。その中で彼は 1832 年に発生したコレラは不十分な下水や汚水槽から発する悪臭や換気の悪さなどが原因であると主張し、ロンドン市民を驚かせた。

その影響で、ロンドンの公衆衛生への意識が急速に高まり、1848 年には公衆衛生法令ができ、検疫官が任命された。さらに、ウィリアム・ファー(William Farr)によって、公衆衛生に統計が導入され、医師には、死亡報告書に病名と死因、さらに年齢、職業などを正確に記す義務付けがなされた。

ナイチンゲールは、1840 年代のロンドンの労働者階級の意識や生活、医学・医療の進歩の実情、そして公衆衛生に対するチャドウィックやファーの積極的な施策などの情報を密かに入手して、夜を徹して読み、知識を養っていた。時代の流れが必然的にもたらしつつあった社会や病院の衛生管理の進歩に対して、ナイチンゲールは積極的に対応し、新しい時代に相応しい看護のあり方を模

索していたのである。

1848 年に続いて、1853-54 年に、ロンドンの中心街でコレラが流行した。しかし、原因がよく分からなかった。ただひとつ分かっていたことはコレラがインドから輸入された病気であることぐらいであった。

ロンドンの衛生行政担当官チャドウィックは瘴気説(miasma theory)を唱え、有害な気体の発生を防ぐため、下水道の整備や水洗トイレの普及を行った。

また、一般民事局の役人で病気の統計学者でもあったファーは 1837 年に病気を風土病、流行病、伝染病 3 つのカテゴリーに分類していたが、1840 年に発酵病(Zymotic Disease)というカテゴリーをつくった。発酵病とは、腐敗した有機物の小粒子が水蒸気などとなって空気中に混じり、人が吸い込むと体内の器官に入って血液の中で有化して死に至らしめるという、彼が独自に瘴気説から作り出した病のことであった。ナイチンゲールはファーのそうした瘴気説に影響されて、*Notes on Nursing* を書いたようにも見える。

しかし、瘴気説を根本から覆す歴史的な大事件が起きた。

1853 年、ヴィクトリア女王が 8 人目の子を生むときに陣痛緩和にクロロホルム(Chloroform)を使用したことで名声を高めた外科医ジョン・スノー(John Snow)は、下痢の症状などから、コレラに汚染された飲料水が直接腸に入って発症する伝染病だと考えた。

疑念を晴らすため実情調査を重ね、ロンドンの中心地ソーホーのブロードストリートにある井戸の水が汚染されていることを突き止めた。汚水槽から滲み出た汚染水や 2 階の住民から中庭に撒き捨てられた汚染水が地面からしみ込んで地下水脈にまで達していたのである。

スノーは、コレラ発症原因としてそれまで主流であった瘴気説をソーホーの井戸水を手掛かりにして覆すことに成功した。それだけではなかった。直接テムズ河へ汚水を流す下水施設を造ることによって、市街地の悪臭の排除に力を入れたチャドウィック等の衛生行政の間違いが指摘された。コレラの原因が悪臭ではなく、汚染された水であったとなると、テムズ川の水を生活水として利用している貧民層への影響は重大であった。スノーが水そのものにコレラの汚染源を発見したことによって、ロンドンの公衆衛生は根本から見直されることになったのである。

3) 初めての看護職 A-1) 2) 3) 4) 5) 6) 8) 13)

ロンドンで公衆衛生上の歴史的な事件が起こっている頃、ナイチンゲールはどうしていたのであろうか。ロンドン

のコレラ騒動と同じ時期にナイチンゲールは人生の重大な岐路に立っていた。

1853年、ナイチンゲールはハーバート夫妻の勧めで、「病める貴婦人のためのアッパー・ハーレイ・ストリート病院」(The Upper Harley Street Establishment for Gentlewomen during Illness)の女性指導監督官(Lady Superintendent)になった。その病院の患者は主に病気になる家庭教師で、病の多くが精神病か癌であったとされている。

ナイチンゲールは病院に住み込み、困窮した財政の再建と管理運営から看護師の教育に至る重大な役割を担った。彼女は、従来の看護師がしていたような付き添いや身辺世話に掛かりきりの看護をやめ、組織的な看護体制を築き、看護師の私生活を管理した。

患者の室内温度を一定に保てるように燃料の補充、質の良い食事が提供できるように貯蔵庫の確認や清潔が保てるようにリネンの数の常時確認といった任務を看護師に負わせた。ナイチンゲールの頭の中にはすでに近代看護のヴィジョンが出来上がっており、「病める貴婦人のための病院」で着実に実践されていたのである。

ナイチンゲールはこの病院で、外科医ボーマン博士(Dr William Bowman)が麻酔を使って癌の摘出手術をした際、看護師として助手を務めたことがあった。その時、ナイチンゲールは医学の新しい時代を手術の助手として直に体験することができたのである。

ナイチンゲールの能力の高さを知ったボーマン博士は彼女にキングス・カレッジ病院(King's College Hospital)の看護師総監督の職を紹介した。キングス・カレッジ病院は1839年にイギリス国教会の下に開設され、救貧院とその付属施療病院の二つ施設から成っていた。

ナイチンゲールがその病院に行くことを知った母ファニーと姉パース(Parthenope)は激しく反対し、思いとどまらせようとした。しかし、ナイチンゲールにとって、看護師総監督として新しい時代に相応しい看護師を育成することができる絶好の機会を逃すわけにはいかなかった。まさにそれは彼女に課せられた天命であった。

地位や家庭の柵の中で生きる古い女性を今完全に捨て去ってしまわなければ、病院では働けなかった。柵の中で生きる母と姉との接触を避けて、エンブリー・ハウスへは戻らなかった。アッパー・ハーレイ・ストリートの病院を出ると、ミドルセックス病院(Middlesex Hospital)へコレラ患者の看護の応援に行ったのである。

ミドルセックス病院へはソーホー地区やブロードスト

リートから患者が送り込まれてきていた。ナイチンゲールはまず患者の衣服を取り替え、身の回りを清潔にしてやった。患者に娼婦が多かったことから、不潔にして吞んでくれて夜街を徘徊している彼女たちのふしだらな生活とコレラとを結び付けていた。

3. リーハーストからの旅立ち A-1) 3), E-1) 3)

コレラ騒動が落ち着くと、ナイチンゲールはリーハーストへ行った。その時、リーハースト・ハウスにはギヤスケル夫人(Elizabeth Gaskell)が滞在していた。

ギヤスケル夫人は1810年にロンドンで生まれ、非国教会派の牧師の妻となり、息子の突然の死の悲しみを機に小説を書くようになっていた。1853年に彼女は *Ruth* という小説を発表していた。

それは「墮落した女」(a fallen woman)という烙印を押されたルースが牧師に救われ、看護婦になって貧富の差別をすること無く病人の看病をし、最後には熱病病棟の看護を自ら志願し、病棟の中で病死する話である。この作品は罪の償いと自己犠牲の愛に生きたルースの信仰の勝利を謳いあげて終わる。その信仰美の世界はギヤスケル夫人の世界そのものであったに違いない。

ギヤスケル夫人は、ナイチンゲールが以前にホロウェイ・ヴィレッジの貧しい病人の家に通っていた話をナイチンゲールの姉パースから聞いていた。また、ナイチンゲールがカトリックの看護修道女に憧れていたことも知っていた。信仰も同じユニテリアンの家庭に育ったギヤスケル夫人はナイチンゲールに対して、ともに同じ世界に生きる者の親近感を抱いていたようである。

しかし、ロンドンのミドルセックス病院からリーハーストに戻ってきたナイチンゲールはギヤスケル夫人が抱いているような世界を共有する人ではなかった。過去の思い出を振り捨て、母ファニーや姉パースの願いを冷酷に無視し、古い考えや利他的な情には囚われない孤高の自由人に変容していたのである。

その夜、ギヤスケル夫人はナイチンゲールの世界に立ち入ることはできなかった。ナイチンゲールの自己実現への意志と決断はギヤスケル夫人のような信仰深いクリスチャンからは非情、冷酷な人に見えるほどであったにちがいない。

翌朝早く、ナイチンゲールは、ギヤスケル夫人をリーハーストに残して、ひとり新たな決意でもってロンドンへと向かったのである。

IV あとがき

筆者は 2008 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究の「研究目的」として、*Notes on Nursing* の難解な英文を文法的に正しく読み取るばかりでなく、著者の思想的背景を考慮し、さらに当時の政治的、社会的影響下にあった看護そのもののあり方を考えながら、大きな視野に立って英文を読み取ることをあげていた。

その目的は 2009 年度発表の報告論文ではほとんど達成することができなかった。この 2010 年度の報告論文では「社会的影響下にあった看護そのもののあり方を考えながら」ということに関しては、部分的にはあるが、かなり達成できたのではないかと自己評価している。

また、2010 年度報告論文を作成する中で、ナイチンゲールの宗教観や看護のみならず医療全体さらに保健衛生などへの優れた見識や看護教育への情熱などをあらためて知ることとなり、その偉大さを思い知らされた。

さらにまた、1840 年代のナイチンゲールの精神的軌跡

をたどることによって偉人ナイチンゲールの原石に触れることができたと感じている。

しかし、それは巨大な原石の一端に触れたにすぎないとも感じている。19 世紀中頃からイギリスに入ってきて、ロンドンを中心に広まったオカルティズムや東洋の神秘思想などがナイチンゲールにどのような、またどの程度の影響を及ぼしていたかは筆者にとって未知のままである。

さらに、彼女の統計学や衛生学などの科学的な知識も並大抵なものではなかったということだけはわかったが、その知識の量やそれが実際どのように発揮されていたかということはこれからの研究課題である。

今後の研究においてそれら未知の部分や研究課題を少しでも明らかにしていきたいと考えている。

受付	2010. 9. 5
採用	2010.12. 8

Nightingale, the Locus of Growth from 1842 to 1854 —On the Basis of Episodes Concerning Embley, Lea Hurst and London—

Satoshi TOKUNAGA, M.A. ¹⁾

Following her experience of taking care of the poor, sick people of Holloway Village in Derbyshire, close to her home at Lea Hurst, it was in 1842 that F. Nightingale decided to follow a vocation in nursing. As a result of this initial experience, she went to the Infirmary in Salisbury for three months to increase her knowledge of medicine and develop nursing skills.

At that time, however, the profession of nursing was considered to be totally unsuitable for someone of F. Nightingale's social class and her mother and sister were totally opposed to her choice of career. She was so disappointed by their attitude that for a while she contemplated suicide.

During this extremely difficult period of her life, F. Nightingale was fortunate to also be encouraged by certain visitors to Embley Park. Two of the visitors were from the USA, Dr. Howe, a philanthropist and Dr. Blackwell, the first woman to be admitted as a doctor. She was also encouraged by two other visitors, Chevalier Bunsen and Mr. Herbert. Indeed, it was through Chevalier Bunsen's introduction that F. Nightingale was able to go to Kaiserswerth, Germany in 1851 to study nursing at the Deaconess Institution.

In 1853, F. Nightingale returned to UK and on the recommendation of Mrs. Herbert took up the post of Lady Superintendent of the Upper Harley Street Establishment for Gentlewomen during Illness. It was during this appointment that F. Nightingale carried out a comprehensive reform of the management and nursing systems.

The confidence which F. Nightingale gained from these early appointments made her realise that she would be able to overcome the disapproval of her family and follow her vocation.

To develop a system of hospital nursing which took full advantage of newly discovered anaesthetics and awareness of the importance of sanitary conditions, which were introduced into the hospital in 1854, F. Nightingale left Lea Hurst where she had taken the first steps towards the Calling of God twelve years previously.

This research report reveals the process of Nightingale's change on the basis of the episodes associated with Embley House, Lea Hurst, and London from 1842 to 1854.

Keywords: Embley House, Lea Hurst, Salisbury Infirmary, reform of hospital nursing, perfect freedom

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing